

# 私立森文庫と村岡格

谷 口 一 弘

## 1. はじめに

明治後期から大正時代にかけて、一般に大正デモクラシーの時代ともいわれ、自由主義的、民主主義的改革の要求が強く主張されていた時代でもあった。だが一方で、日露戦争は莫大な軍事費の出費を生み、その結果として国内経済の基盤は疲弊し、農村の窮乏化は著しいものがあった。

戦争を通じて急速に発展した日本は、同時に国内的には政治・経済・社会的に多くの不安と動揺、そして矛盾が顕在化した時代でもあり、政府としてもその不安や矛盾に対処する方策が急務となっていた。

そのため政府は、先の日露戦争勝利を国家的慶事と捉えることで、国内的に高揚したナショナリズムを誘導し、国民教化の徹底を図ることで、日露戦争後の国家経営を進めることであった。地方改良運動がそれである。

明治41（1908）年、「戊申証書」の煥発を契機とした地方改良運動は、内務省を中心に農商務省、文部省、財界さらには報徳社運動と結びつき強力に推進された。この運動の指導理念は、「一村一家観念、分度推譲、勤儉貯蓄等を機軸とした親睦協和と勤労精神の鼓舞であり、この思想的根拠は報徳精神に求められた」(1)のである。

この地方改良運動の地方での担い手となったのが、地方地主層をはじめ、町村長、地方官吏、警察官、僧侶、神官、学校長、教師などいわゆる地方

の名望家・有力者たちであった。それがやがては、労働者や青年会、婦人会、保護者会などもその傘下に取り込まれていくことになる。

「勤儉貯蓄」と「勤労精神」の鼓舞による「国民精神」の作興を基軸とした地方改良運動は、北海道でも例外なく地方にまで浸透していった。

明治44（1911）年刊行の『戊申証書と地方事績』(2)は、当時の北海道内における地方改良運動としての具体的活動施策を揚げ、実践の成果を挙げているとされた273団体の事例を紹介し、奨励している。

この事例の中で、12団体による図書館・文庫の設置・経営の報告がみられる。本稿は、この12団体の事例のうち、地方教育会による図書館経営の実際を、私立森文庫（以下「森文庫」という）で検証しようとするものである。

森文庫は、当初は一個人によってスタートしたが、1年後には賛同者による共同の経営となり、その後まもなく森村教育会が引き継ぐことで運営された。場所は、茅渚郡森村（現森町）であった。そして、森文庫の運営での重要な役割を果たしたのが医師村岡格であった。村岡は、後に森村の隣、七飯村（現亀田郡七飯町）でも私立岳陽文庫（以下「岳陽文庫」という）を設置している。

現在、森町教育委員会が所管している村岡文庫の関係資料(3)をもとに、村岡格と森及び岳陽両文庫との関係も併せ考察する。

## 1. 森村における新聞縦覧所

北海道における新聞縦覧所開設の動向は、当時の函館、江差、松前を中心とした道南地方で早くからその動きがみられていた。(4)この道南地方に位置する森村でも、少し遅れたが新聞縦覧所開設の動きがみられた。

明治21（1888）年3月7日、森村に新聞縦覧所開設の新聞報道がされている。(5)それによると、

森通信（三月三日付）新聞縦覧所 郡役所の諸氏と人民中の有志者の尽力にて客月二十三日より当地菊地志賀エ門氏の店前に新聞縦覧所を設けられ東京四大新聞其他雑誌類とも合計十五六種を備て各人の閲覧に供せらる

明治21年2月23日、森村の商人菊地志賀エ門に郡役所の官吏が協力するかたちでの開設である。

備え付けられた新聞は、東京四大新聞とあるが、これは、『読売新聞』『東京日々新聞』『郵便報知新聞』そして『朝野新聞』のことであつたろうか。またここには、当時の地元紙ともいえる『函館新聞』（明治11年1月創刊）や、この記事を掲載の『北海道毎日新聞』（6）は、備えられていたのであろうか。あるいは、「其他」に含まれていたのかは明らかではない。

さらに、新聞の他に用意されたとされる雑誌類もどのような種類が備えられたのか。その経費の負担、閲覧料の有無、縦覧所の利用状況や存続期間など、この新聞記事以外の情報は、現在のところ確認できていない。

## 2. 森文庫の開設

森村に新聞縦覧所が開設されてから20年、明治41（1908）年金物店を営む成ヶ沢賢治所蔵の図書類が一般公開された。この個人蔵書の公開が多く賛同者を集めることになり、翌年には森文庫として正式の発足となったものである。

この間の経緯については、『戊申詔書と地方事績』（7）の中で、「慈善救済事業」の自治団体及公共集団の一つとして「森文庫と風俗改良」を推奨し、次のように紹介されている。

森文庫の設立者は森村成ヶ沢賢治にして全氏は性温良品行方正飲酒喫飲を為さず其嗜好とする所は書籍にして従て読書に尠なからざる趣味を有し其蔵書数百に上れり偶々森村長佐野義正の勧むるあり矯風の一

策として図書館設立を以てす氏は直ちに之に賛し自己所有の一家を縦覧所に充て明治四十一年十一月自己の蔵書全部を茲に移し一面諸方に図書の寄贈を需め又私費を投して書籍を蒐集し以て開館せり今は既に五千余冊を算するに至れりと

まさに地方改良運動の模範事例として、取り上げられているのである。成ヶ沢賢治は、先に明治35（1902）年から2年間、森村収入役を務めていた。このことも、当時の森村長佐野義正の「矯風の一策」としての勧めへと結びついたといえる。文庫は、この佐野村長の勧めで自宅店舗の一室を使用し、公開したのが明治41（1908）年11月であった。場所は、茅部郡森村大字森村字柳原（現森町本町東部大通り）であった。

その後、落合幸作、村上儀七、吉田定助、大井卓郎等多くの賛同者による書籍の寄贈もあり、蔵書およそ2,000冊に増えたことから、翌42年2月23日森文庫として正式に発足したものである。

この文庫は、単に書籍の縦覧に止まらず、「縦覧所の一室に娯楽所を設け碁将棋の娯楽器を備へ一面昔噺伝記等中簡易にして且つ趣味に富み不知不識修養の資となるべきものを蒐集して児童青年の來庫」(8)に応えようともしていた。

文庫の図書は、単なる縦覧だけではなく貸出もされており、その館外貸出では閲覧料も徴収していたようである。また縦覧室には、碁将棋なども置くことで、文庫が一種村の娯楽施設の要素も持ち、村内青年達がよく集まる場でもあったことが推察される。

こうしてスタートした森文庫であったが、組織体としてはどのように構成されていたのであろうか。唯一の手掛りとして、文庫開設の翌月、森文庫によって開催されたとみられる、展覧会に関する書面が残されている。

それは、展覧会出品物品の「預り証」で、次の様な文面である。

証

左記物品本庫主催ニ係ル展覧会ニ御出品被下正ニ預リ候也

明治四拾貳年三月 日

森文庫開催展覧会委員

村 岡 格

堀 川 養 清

前 川 要 吉

喜多山 喜三郎

成ヶ沢 賢 治

この「預り証」に連名の医師村岡格、貸座敷業堀川養清、商人前川要吉と喜多山喜三郎、それに金物業成ヶ沢賢治の5氏が森文庫の経営を担った中心人物達であると言える。そしてこの中で特に、長年公立森病院々長を務めその後開業医となっていた、村岡格が文庫経営の中核的役割を果たしていたものと考えられる。だが展覧会では、どのような物品を借用し、どのような展示がなされたのか詳細は不明である。

この件に関しては、医師村岡格が森文庫経営の中核であったということ的前提にすると、そこにヒントがある。それは、村岡格が森村に赴任して以来、多くのアイヌの人々との深い交流があったことにある。

村岡は、森村にあって医療のかたわら、地域の経済や文化の分野にも幅広く活動をしている。特にアイヌの人々との親交を通して、彼等民族の風俗研究をなし、アイヌの生活調度品や民族資料の収集にも努めていた。これらの収集品をもって村岡は、七飯村で岳陽文庫を開設した際、文庫内にアイヌ民族資料を常設展示している。

このことから、森文庫で開催の展覧会においても、アイヌ民族関係の資料展を開催したものと考えられるのである。「預り証」は、この時の展示資料の提供者に用意された書類である。いわば、文庫を図書館としての機能だけではなく、教養・娯楽的要素も付加した施設の性格付けを意図して

いたものと考えることができる。

また、この展覧会の翌43年頃と推察される図書寄贈依頼の文案が残されている。これによると、文庫の蔵書も順調に増加をみせ、利用者も徐々に伸びている様子が窺える。

謹啓

益々御清祥の段邦家の為誠慶賀に候、陳者本文庫は去る明治四十二年二月の創立にして日尚浅きにも不拘江湖諸彦の深甚なる御同情に依り日に月に其歩を進め内外の改善を図りたる決果、今や蔵書五千有余冊を算えるに到り館外貸出図書の数、一日数十人数十冊を計ふるに到る。是れ偏に世の志士仁人の賜にして本文庫主の感謝措く能はざる扱に有之候。然るに素と本文庫は創立の当時より誠に微弱なる一私人の資力を以て経営し得ることとて、其蒐集る所の書冊の如きは世の篤志家諸彦の寄贈に待つもの多き様の次第に有之候処、今般貴〇〇〇〇知るを得申候、就ては本文庫は茲に謹で右〇〇〇〇御寄贈の栄に預り度懇願奉候。

幸いにして御許容下被る々を得ば単り本文庫経営者の幸のみに無之候。先は御依頼旁如此に御座候忽々敬具

明治 年 日

私立森文庫

### 3. 森文庫の活動状況

この森文庫の活動の実際を、数字によって概観してみる。表1は、『文部省年報』『北海道教育沿革誌』『北海道教育概要』及び『北海道庁統計書一学事の部一』により採録したものである。

表のデータとしては、明治41年度から昭和7年度間の数値である。このうち大正7～9年度及び大正11～昭和4年度のデータは、上記採録4誌で

は収録されていないため空欄となっている。又、昭和8（1933）年度以降についても同様である。

表でまず気が付くのは、この森文庫が閲覧料を徴していたということである。閲覧規定のようなものが確認されていないため、どのような方法で、その基準はどうなっていたのかははっきりしない。ただ推察できる手掛りとして、後に森文庫を引き継いだ森村教育会（大正4年）の「図書閲覧規定」では、閲覧料として「図書1冊ニ付金貳銭ヲ徴収ス」とある。

これは、単に入館料としてではなく、書籍1冊当りの貸出料としての料金設定である。森村教育会が文庫を引き継ぐ際に、それまで習慣的に適用されていた内規を、正式に明文化されたものと考え、森文庫としての発足当初の閲覧料徴収も、基本的には教育会の規定と差異のない条件であったと考えられる。

表1 森文庫統計

年 度	図 書 冊 数 (冊)			開館日数 (日)	閲覧人数 (人)	閲覧料 (円)	経 費 (円)		
	和漢書	洋 書	合 計				経常費	臨時費	合 計
明治 41	2,864	13	2,877	—	—	—	30	—	30
42	3,200	37	3,237	328	548	10	285	—	285
43	4,900	85	4,985	300	1,500	118	425	—	425
44	4,955	85	5,040	327	2,160	43	163	—	163
45	4,980	95	5,075	—	500	—	—	—	—
大正 2	4,977	98	5,075	—	—	—	—	—	—
3	4,980	100	5,080	—	—	—	—	—	—
4	1,300	—	1,300	—	—	—	—	—	—
5	1,350	—	1,350	—	—	—	—	—	—
6	1,400	—	1,400	300	300	—	—	—	—
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	1,000	30	1,030	休館中	—	—	—	—	—
昭和 5	1,485	15	1,500	—	—	—	—	—	—
6	1,485	15	1,500	—	—	—	—	—	—
7	1,485	15	1,500	—	—	—	—	—	—

※ 明治41、大正2～6年度は『北海道教育沿革誌』、明治42～45年度は『文部省年報』、大正10年度は『北海道教育概要』、昭和5～7年度は『北海道庁統計書』によった。

ところで、この閲覧料すなわち閲覧収入が、明治42年度で10円、43年度118円、44年度43円と、そこには大きなばらつきがあり閲覧人数との整合性がない。閲覧料が書籍の貸出料金であるとする、このばらつきは図書貸出冊数の年度による変動を示していることになる。しかし、統計上での貸出冊数は、数的には確認できない。だが、この閲覧料からみると、いづれにしても文庫の維持はとうてい難しい。結局は、文庫維持費としての経費の不足分を、共同経営者等による寄付すなわち持ち出しとみると、ここに文庫としての一つの限界を示唆しているとみられる。

明治41年度の開館日数、閲覧人数及び閲覧料が空欄なのは、この年度に成ヶ沢賢治が個人で「矯風の一策」として、文庫を慈善的に開設したため、自己所蔵の図書数の確認のみであったことが理由である。文庫経費としての経営費30円の支出も、成ヶ沢個人の出費と考えられる。

1日平均の閲覧人数をみると、明治42年度1.5人、43年度5.0人、44年度6.6人で、数値としては極めて低いようにみえる。しかし、当時の森村の人口は、明治42年で8,461人、明治43年で8,966人であった。これは、まだ開拓途上にあつた北海道を取り巻く背景・状況からみて、特に明治44年度の閲覧人数2,160人は人口比に対して、むしろ極めて高い数値といえる。

ただ、明治45年度の閲覧人数500人は、同年度の開館日数が未記入のなかでの数値となっており疑問の残る数字である。

蔵書冊数でみると、明治41年度に成ヶ沢賢治私有の個人蔵書から



森文庫図書印



スタートし、その後順調に所蔵冊数が増加している。明治42年度の3,237冊から45年度には5,040冊と五千冊台に達し、大正3（1914）年度の5,080冊をピークに、この間ほぼ横ばいで推移している。

ところが、翌大正4（1915）年度にはこれが一気に1,300冊となっている。以後は1,350冊、1,400冊と回復されていない。これはいかなる原因によるものであろうか。

これを年間増加冊数でみると、明治42年度360冊、43年度1,648冊で最大の増加となっている。以後、44年度55冊、45年度35冊、大正2・3年度各5冊とやはり一気の減少から、大正4年度は増加冊数マイナス3,780冊である。このデータからも、文庫としての活動期間が実質は明治42～44年度の3年間であったことを裏付けている。明治45年度からは、文庫は実質的には休館状態にあったとみるべきである。

『村岡文庫目録』によると、「図書雑誌配達控簿」と「雑誌収受控簿」2種類の簿冊の収蔵が記録されている。いずれも明治43年のものである。この控簿によると、『実業之日本』『太陽』『婦人画報』『中学世界』『冒険世界』『新小説』『ホトトギス』『演劇画報』『少女の友』『幼年の友』など、およそ30種以上もの雑誌類の購入及び配達記録の控である。つまり、毎月30種以上もの雑誌類を一括購入し、これを希望者に配達している記録である。

このことは、文庫が単に図書類を縦覧する場としてだけではなく、森村の書店としての役割も果たしていたことを物語っている。

大正2（1913）年5月、森文庫の共同経営者であり、かつ文庫経営の中心人物の一人であった村岡格が隣村の七飯村字大沼に転居している。従来、この村岡格の転居が、文庫の蔵書冊数激減の大きな理由であり、その結果が文庫経営不振の起因であるとされていた。(9)

大正4年（1915）になって蔵書が急激に減少しているのはどういうわ

けであろうか。これは推測であるが、大正2年に村岡格が七飯村に転居したことに原因があるのではないだろうか。森文庫経営に関与した中心人物を失い、さらに、文庫にあった村岡の蔵書が返却されて、文庫の蔵書が減ったのではないだろうか。

この指摘を表1の蔵書統計で見ると、森文庫の大正2・3年度の蔵書は減少していない。むしろ微増である。また、村岡格が七飯村へ転居の大正2年7月、その地で岳陽文庫を開設しているが、それに必要な森「文庫にあった村岡の蔵書の返却」図書を充てたのが要因としている。しかし、岳陽文庫の蔵書が村岡格の所蔵本によるものとする、岳陽文庫統計(表2)でみる限り、蔵書およそ千冊でスタートしており、この数値では、森文庫の蔵書減少冊数とは直接的関連性は考えにくい。

むしろ、「森文庫経営に関与した中心人物」としての、村岡格の森文庫内での立場にあったと考えるべきである。つまり、先の「図書雑誌配達控簿」及び「雑誌収受控簿」が示すように、森文庫は書店としての機能も有していた。そして、その経営の実際を担っていたのが村岡格であった。その中心的人物の転出により、これまでの書店機能が失われ結果利用者の足が文庫から遠く一因となったとみるべきである。

結局、中心人物村岡格の転出によって、森文庫の活動が実質的な休館状態に陥った。このことが、他の共同経営者の蔵書引き揚げの引き金となり、大正4年度の大量の蔵書冊数の減少へと結び付いた理由である。

ところで、この森文庫について新聞紙上では、どのように報道されていたであろうか。『函館毎日新聞』(10)では、「本道の私立図書館は都合七個にして」と、札幌、空知、網走、枝幸、函館、上川、そして森文庫について、その利用統計データを掲載している。その解説記事の森文庫の統計データをみると、

本道図書館成績

本道の私立図書館は都合七個にして札幌区の道教育会附属の図書館が去三十二年に創設されたるを始めとし枝幸図書館の三十六年に於て空知の三十九年に及び函館上川網走森（文庫）の四館はいずれも昨四十二年の創立開館にして今回道庁教育課に於て調査して昨年度の統計を見れば上川図書館の如きは仲々成績良好の部に属すべし左表に就て見るべし

名称	和漢書	洋書	開館日数	閲覧人員
森文庫	3200	37	328	548

ここでの統計データは、表1の明治42年度と同一のデータであり、森文庫が明治42年2月開館後、この新聞記事のあった明治43年11月の時点までは、順調に経過していることが窺われる。

さらに、同紙44年でも、同内容の記事が掲載されている。ここでは、図書館数が前年の7館から9館に増え、統計データも明治43年度分実績のものとなっている。(1)

#### 本道の図書館

道庁教育係の調査に依れば道管内に於ける現在図書館の総数十個処にして昨年（明治43年）に於ける現在書籍開館日数及び閲覧人員左の如しと

だが、ここでの森文庫も含め対象となっている図書館統計データは、「昨年」すなわち明治43年度分ではなく、いずれも一昨年明治42年度分のデータである。従って、森文庫の動向を知る何らかの手掛りとはならないのが残念である。

## 4. 森村教育会による森文庫の再開計画

成ヶ沢賢治個人の蔵書からスタートして1年後には、村岡格等との共同経営となった森文庫であったが、その3年後には早くも不振に陥っている。統計データの上では、明治45年度からは開館の実際がみえてこない。この

頃には、すでに実質上休館状態にあったものとみられる。

一方これより少し前、明治44（1911）年1月、森村教育会が結成されている。この教育会の中で、不振に陥っていた森文庫立て直しの方策が検討されていた。大正2（1913）年の新聞報道によると、

管内二図書館

函館支庁管内に於ける私立図書館は僅に二ヶ所あるのみにて今之が調査を聞くに左の如し——（中略）——

△森文庫 森村教育会の設立にして森村大字森村字柳原にあり四十二年二月二十三日の設立に係り一年の経費総額は四十六円にして其内図書購入費三十円あり蔵書数は未詳なれども前年の調査に依れば三百七十部一千二百四十六円（冊）あり目下は整理中にて休館し居るを以て閲覧人員なく近く設備完成せば公開すべしと(12)（ ）内は筆者。

新聞の日付は、大正4年4月13日で、この時にはすでに「森村教育会の設立にして」と、移管されている記述となっている。だが、記事内容は「一年の経費総額」46円も、「其内図書購入費」30円も共に表1の統計データでは確認できない。また、「前年の調査に依れば」とある蔵書数もやはり、表1の統計データのどの年度とも一致しない。ただはっきりしているのは、「目下は整理中にて休館」中であり、開館に向け準備中であるということだけである。

大正2年9月森村教育会において、次のような協議がなされ、その内容が機関紙『森之教育』に掲載されている。(13)

例会次は去る24日を以て開会したり其重なる問題は左の如し

二、改元記念事業ヲ変更シ森文庫ヲ教育会ニ於テ引受ルノ件

森文庫の引受けに一同賛成し前経営者成ヶ沢賢治君を優待することに決す詳細は次号に譲る。

つまり、大正2年9月24日開催の森村教育会例会に於いて、案件となっていた森文庫引き継ぎ事項が決議されている。ただ、懸案であったこの森

文庫引き継ぎの件は、これ以前から検討されていたものと考えられるが、教育会の機関紙『森之教育』のバックナンバーでは、記録がなく経過が不明である。唐突の感はあるが、実際は教育会の中では幾度かの協議がされていたものと考えられる。

こうして、大正2年9月24日森村教育会が正式に森文庫を引き継ぎ、休館中の文庫再開に向け準備に取り掛かることになった。この間の詳細を、教育会会長佐野雨田（義正）(14)が、機関紙『森之教育』第6号の巻頭で次のように説明している。(15)

◎森文庫の引受に就て一言す

前号所報の如く本会は愈々成ヶ沢君の経営に成れる森文庫を引受くることとなりたるが、或人は我森村の民度は未だ文庫の再開を必要とせぬ、論より証拠は観覧券の収入は以て其の経費を償ふに足らざるにあらざるやと言ひたりとか、是れ実に皮想の管見にして、民度が進まざればこそソコに社会の教育の必要が起こるのである。観覧券の収入がナダ、一体図書館や文庫の事業は私利を離れて之れを経営せねばならぬ微塵、営利的の欲念を萌さんか、モハヤ、図書館ではない、文庫ではない貸本屋である。——（中略）——唯憂ふところのものは読書人の少なきことである。イヤ読書人は相応にあるけれども、炉辺に手を亀めて書籍推裏に出頭没頭している人が多く、三冬の寒威に屈せず新文庫に来て珍書を渉猟する人が乏しきことを嘆息するのである。

（雨田）

「前号所報」の前号とは、前述の第5号を指している。「一体図書館や文庫の事業は私利を離れて之れを経営せねばならぬ微塵、営利的の欲念を萌さんか、モハヤ、図書館ではない」と、文庫の経営は閲覧料で充足できないことは充分認識している。むしろ、森村教育会会長にして村長佐野義正は、地方改良運動における「矯風の一策」の実践の重要性和精神的意識の作興を強調している。

こうして、森村教育会により再開が図られた森文庫は、その後どのような経緯を辿ったであろうか。文庫が教育会に引き継がれた翌大正3(1914)年度の「森村教育会歳入歳出予算表」によると、「雑収入」として「図書閲覧料」1,000円が計上されている。(16)つまり、閲覧収入の見込み額である。

歳出の部では、「文庫費」21,000円で内訳は「設備費」として21,000円とある。この「設備費」の内容は、「文庫設備費」20,000円、「雑費」1,000円が歳出予定となっている。さらに、「文庫設備費」20,000円の明細は、文庫書棚の新調代として1個2,000円を10個となっている。「雑費」は、炭・油購入費となっている。

ところが、教育会として文庫経営を引き受け、文庫維持費を予算化してはいるが、表1の統計データ上では文庫開館の形跡がないのである。大正3年度での蔵書数も5,080冊を有し、教育会の機関紙でも文庫への図書・雑誌類の寄贈報告がなされている。だが、森文庫は再開されてはいなかったのである。

## 5. 森文庫の巡回文庫計画

大正4(1915)年5月の『森之教育』に、「本会記事」として次のような記録がみられる、(17)

会則改正 去る二月七日開催の臨時総会に於て改正の本会々則左の如し

森村教育会々則

総 則

—— (中略) ——

第五条 本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事業ヲ実行ス

一、教育上ニ関スル調査及研究ヲナスコト

- 二、表影ニ関スルコト
- 三、教育品展覧会及通俗講話会ヲ開催スルコト
- 四、風敬ノ改良及指導
- 五、貧窮児童ニ学用品ノ貸与及給与
- 六、他ノ町村教育会及上級教育会ト気脈ヲ通ズルコト
- 七、行政庁ノ諮問ニ対シ調査申報ヲナスコト
- 八、会報ヲ発行スルコト
- 九、其他本会ノ目的ニ伴フ必要ナル事項

——（中略）——

#### 附 則

本会則ハ大正四年四月一日ヨリ実施ス

ここでは、教育会の事業項目としての森文庫経営の記載がない。すでに、大正2年9月の教育会例会で文庫引き継ぎを決議して以降、この時点では明確な文庫経営の方向性が、明記されていないのである。第五条の九「其他」での対応は考えられなくもない。だが実際には、この会則改正の大正4年2月7日の時点では、森文庫再開の具体的スケジュールが未確定であったことが、その理由とみられる。

その後、大正4年6月5日の例会で、「森文庫図書閲覧規定」が整備され、ようやく文庫再開のメドがついたのである。(18)

#### 森文庫図書閲覧規定

- 第1條 本文庫ハ學術ノ研究智徳ノ啓発読書趣味ノ涵養ヲ一般ニ普及スル為メ何人ニモ図書ヲ閲覧セシム
- 第2條 本文庫ノ図書ヲ閲覧セントスル者ハ文庫管理者ニ申出ツベシ
- 第3條 本文庫ノ図書ハ閲覧者ノ便ヲ図リ館外貸出ヲ為ス
- 第4條 閲覧者ハ図書ノ取扱ヲ丁寧ニシ汚損セザル様注意スベシ
- 第5條 借覽中ノ図書ヲ破損又ハ紛失シタル者ヨリハ修理料又ハ弁償金ヲ徴収ス

但シ修理料及弁償金ハ管理者ニ於テ其額ヲ決定ス

第6條 管内ニ於テ閲覧セントスル者ヨリハ閲覧料トシテ金壹錢ヲ徴収ス

但シ当分ノ中閲覧料ヲ徴収セズ

第7條 館外ニ於テ閲覧セントスル者ヨリハ閲覧料トシテ図書1冊ニ付金貳錢ヲ徴収ス

但シ5日以上据置クコトヲ得ズ

第8條 図書ノ貸出ハ森村役場管内居住者ニ限ル

第9條 文庫管理者ハ時宜ニ依リ図書ノ貸出ヲ謝絶スルコトアルベシ

#### 附 則

本規定ハ大正4年6月10日ヨリ実施ス

この規定によると森文庫は、その目的を「學術ノ研究智徳ノ啓発読書趣味ノ涵養」（第1條）にあると明記している。そのため「図書ハ閲覧者ノ便ヲ図リ館外貸出ヲ為ス」（第3條）とし、館内での利用には、規定上「閲覧料トシテ金壹錢ヲ徴収ス」（第6條）としながらも、実際には「当分ノ中閲覧料ヲ徴収セズ」（第6條）としている。閲覧料として、館外貸出に「図書1冊ニ付金貳錢ヲ徴収」（第7條）し、貸出期間を5日間とした。

附則で「本規定ハ大正4年6月10日ヨリ実施ス」と、ここで森村教育会としての文庫再開の期日を、大正4（1915）年6月10日開館を明記している。この決定後の経緯は、どのようであったろうか。表1の統計から見る限り、大正4年度以降の活動実績の記録が不詳である。

しかし、同年9月17日には、森村教育会臨時総会において、天皇即位紀念事業の一貫として、巡回文庫を開設し同年11月1日よりの実施を決議している。だがこれも準備不足のため実施は先送りとなったようで、やはりこの件に関する統計的なデータが不明である。だが、この巡回文庫の取り扱いに関しては、その後に実施策が再燃している。



また、統計上で大正6（1917）年度の実績として示されている、蔵書数1,400冊、開館日数300日、閲覧人数300人とあるのは、表示された数値としては、整い過ぎの感があり疑義の残るものである。大正10（1921）年度の数値も同様である。やはり、文庫としての活動再開があったのであろうか。

大正6年2月の『森之教育』(19)によると、教育会総会において「十二月二十四日定期総会ヲ森小学校ニ開会シ会長選挙ノ件及森文庫巡回規定ノ件ヲ付議」されたとある。これは、前年の大正5（1916）年12月24日の定期総会で、巡回文庫の実施を決定したということである。

さらに、「巡回文庫規定は原案ニ修正ヲ加へ実施スルコトニ決ス（規定ハ次号ニ記載ス）」と、定期総会では巡回文庫実施のための巡回文庫規定も併せ原案の一部修正のうえ決定している。だが、「次号ニ記載」予定の巡回文庫規定は、「次号」の機関紙発行の形跡がなく従って内容が不詳である。

これは、森村教育会機関紙『森之教育』が、この第24号以降の刊行実態が不明だからである。第24号が機関紙の最終号なのか、それとも継続されていたのか、また森村教育会の存続についても不詳である。第24号中では、この件を示唆する記載がみあたらない。従って、これ以降の森文庫に関する詳細は、その蔵書の行方も含め未だ確認されていない。唯一、『北海道教育概要』大正10年度の森文庫の欄内に「休館中」の記載が見られるだけである。

大正6年度の道内図書館界の動向に言及した、新聞記事がみられる。この記事は、大正7（1918）年8月1日～9月19日まで開催された、開道50年記念北海道博覧会の記念事業の一貫として、拓殖図書館の議がなされたことに対する「一道民」の声として、新聞に掲載されたものである。これによると、(20)

読者の声 拓殖図書館設立に対する一寧ろ既成設備を補成せよ一

札幌一道民

——（中略）——

本道の文運も盛んになり文庫や図書館も少なからず儲けられてある其内稍々名の著はれて居るのは枝幸、網走、上川、小樽、函館の五私立図書館森の森文庫七飯の岳陽文庫及び札幌空知十勝釧路の四教育会附属図書館並に東北帝国大学農科大学図書館札幌北九条小学校附属図書館札幌女子小学校附属戊申文庫稚内小学校附属日新文庫北海中学校附属北駕文庫等であるが未だ完備せざるものであることは無論だから今回振向けた費用を分けて各図書館（農科大学図書館を除く）や文庫に補給し此等図書館や文庫を機関として拓殖図書館を新たに設けたと同様否々ソレ依り以上の効果を収めしむることは良策だと思ふ

と、ここでは「未だ完備せざるものである」のが、現実の図書館であると述べている。このことは、森文庫も決して順調に推移していたとはいいたがたいと推察される。

## 6. 村岡格による岳陽文庫開設

村岡格は、明治13（1880）年10月、森村の第九公立病院（森病院）院長として赴任し、森村とその近村の医療に尽力をした。明治23（1890）年5月、同病院長を辞し同じ森村字柳原に転居、同7月個人病院を開業した。村岡格42歳のときであった。

この頃より村岡格は、砂金採取事業、生命保険代理店、運送業の開業、森・室蘭間定期航路の開設などの事業にも乗り出すなど、経済活動の面でもこの地方に実績を残している。その後大正2（1913）年5月、森村の隣村七飯村に移転した。村岡格64歳のときであった。

村岡格は、七飯村に転居後も開業医を続けるかたわら、厚生貯蓄組合の設立など積極的に事業活動を継続している。転居後まもない大正2年7月

25日、これまでの森文庫での経験を生かし、岳陽文庫を開設した。場所は、亀田郡七飯村大字軍川字長井川であるとされている。

表2 岳陽文庫統計

年 度	図 書 冊 数 (冊)			開館日数 (日)	閲覧人数 (人)	閲覧料 (円)	経 費 (円)		
	和漢書	洋 書	合 計				経常費	臨時費	合 計
大正 2	1,008	109	1,117	100	495	—	35	—	35
3	1,008	115	1,123	100	500	—	35	—	35
4	1,142	—	1,142	184	183	—	18	—	18
5	1,142	—	1,142	—	—	—	—	—	—

※ 大正2～4年度は『文部省年報』、大正5年度は『北海道教育沿革誌』によった。

表2は、岳陽文庫の統計であるが、大正2～4年度は『文部省年報』により、大正5年度は『北海道教育沿革誌』によった。統計では、文庫としての活動期間は、大正2～5年度までの4年間であるが、実質的には大正2～4年度までの3年間であったといえる。

蔵書冊数1,117冊でスタートしているが、大正5年度で1,142冊と、この間の増加は僅かに25冊である。文庫としての4年間の活動期間中は、ほぼ蔵書冊数に大きな変化がみられないのが特徴である。おそらく、蔵書の多くは村岡格の所蔵本を中心とした開館であったとみられる。

開館日数では、大正2、3年度がともに100日で、極めてすくない。これが大正4年度で184日となり、ほぼ2日に1日の割合での開館日数となっている。いわば、日常的に文庫の管理・運営に当たる、専任職員が不在であった可能性がある。

従って、文庫利用者も閲覧人数は、大正2、3年度は1日平均5人程であるが、大正4年度は1日平均1人弱の利用ということになる。

また、この統計表から見る限り、閲覧料を徴収していない。従って、文庫維持費は、村岡格の自費によるものと考えられる。

図は、村岡格の所持品の中に含まれていた、岳陽文庫の「入場券」であ

る。この「入場券」は、およそヨコ4.8×タテ7.4cmの名刺版より若干小さめの用紙に、「青インク」による「入場券」のスタンプが、そして朱による「岳陽文庫」の押印がなされているものである。村岡格の書類箱に、未使用の状態で多数残されている。おそらく、この「入場券」が閲覧票として、文庫利用者に配布することで使用されていたものであろう。

また、『村岡文庫目録』によると、この岳陽文庫に関わるものとしては、他に『看板「岳陽文庫」木製』と「岳陽文庫展示室」(写真)1枚とがある。『看板「岳陽文庫」木製』は、そのサイズが未記載であり、かつ今のところ現物が不明で、確認できていないのが残念である。

写真は、11×15cmのサイズでアイヌ民族資料の展示風景となっている。

これは、村岡格の蒐集になるもので、岳陽文庫内に常設展示されていたものと推察される。



岳陽文庫「入場券」

## 7. 村岡格とお雇い外国人エルドリッジ

ところで、森文庫と岳陽文庫、二つの文庫経営に関わった村岡格は、いつどのような機会に図書館思想と出会い、そして実践へと向かうことになったのであろうか。このことを解くカギは、格の医師として勉学に志した過程にそのヒントがある。

村岡家は、松前藩医の家系にあり、父親は10代村岡義信(啓齊)である。格は村岡家8人兄弟の次男として、嘉永3(1850)年8月15日、松前に生

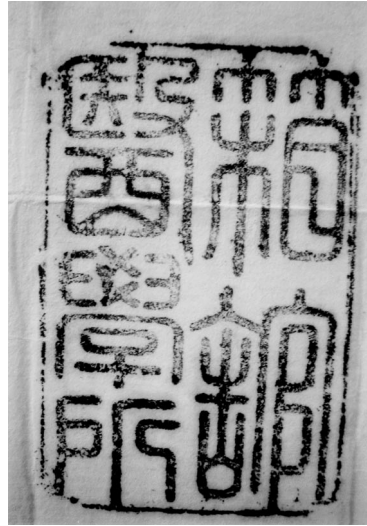
まれた。長男が10歳にして亡くなったため格は、村岡家の11代となるべく、医学の道へと歩むことになる。

だが、医学の道へ踏み出す少し前、元治元（1864）年頃、格は松前藩々校徽典館に学んでいる。格14歳頃のことであった。この徽典館は、文政4（1821）年設置され、弘化（1844～47）年間に、第16代藩主松前昌広によって藩校内に萬巻楼文庫（21）を付設し、藩士の子弟に利用させている。

格は、藩校徽典館で学ぶことで、必然的にこの萬巻楼文庫を利用することになった。この萬巻楼文庫の利用が格をして、書物の効用を意識させる最初の契機となったものと考えられる。つまり、蔵書は纏まってあるからこそ価値があり、その量的纏まりの利用がより大きな効用を生むことを経験したことである。

万延元（1860）年、箱館（函館）医学所が創設された。その後、この医学所は明治3（1870）年10月、太政官示達により開拓使立函館病院附属函館医学所として、医学生を受入れ教授をなしている。明治4（1871）年8月、開拓使顧問ケプロンの書記兼医師としてアメリカ人医師エルドリッジ（22）が来日し、開拓使外科医長として函館病院に赴任した。

函館医学所は、明治5（1872）年8月生徒を募集した。翌6年7月の記録によると、この時点での医学所入学生は17名となっている。17名中官費生9名、自費生6名、通学生2名とあり、この自費生の中に村岡格の名前がみられる。



箱館医学所印

村岡格が、自費生としてこの開拓使函館医学所に入学したことで、お雇い外国人教師エルドリッジとの出会いの機会を得たのである。エルドリッジは、開拓使顧問ケプロンの一行として函館に着任前、アメリカ農務省図書館司書(23)としての経験と実績を有していた。従って、このエルドリッジの経験が、何らかの形で医学生に継承され、特に村岡格の萬巻楼文庫での経験を刺激するもう一つの転機となったものと推察される。

すなわち先の徽典館萬巻楼文庫での、纏まりのある蔵書の有用性を体験し、さらに医学生としてエルドリッジとの交流で得た、欧米の図書館思想との出会いが、後の村岡格の文庫設置の実践へと結びついたものと考えられる。

近代日本の図書館思想の移入には、三つのパターンがあるとされている。(24) それは、一に欧米への視察者・留学生の帰国報告・紹介、二にお雇い外国人等の建言、そして三に欧米の文物の翻訳・翻案である。特に、お雇い外国人等の建言としては、開拓使顧問ケプロンの黒田開拓次官宛書翰(25)が、その典拠例としてしばしば引用されている。

このケプロンの書記兼医師として来日のエルドリッジによる、医学生との接触を通しての図書館思想の啓蒙が、村岡格の実践へと結びついたものである。これもまた、お雇い外国人による建言の事例としても捉えることができる。

## まとめ

森文庫は、明治41年成ヶ沢賢治個人による「矯風の一策」の意志のもとに開設された。地方改良運動という時代の要求に応えるべく、多くの地元有力者の賛同を得て、やがて森村教育会にその経営を委ねられることになった。

文庫が賛同者と共に運営される中で、単に図書館機能だけではなく、書店として村民の読書要求に応じ、また碁・将棋などの娯楽器具も備えさら

には、アイヌ民族資料の展覧会を開催するなどしている。

このことは、文庫を中核とし、さらに多様な教養・娯楽の場を提供することで、森村の総合的文化センターとしての機能を、担うことを意図していたと見ることができる。そして、その中心にいたのが、村岡格であった。

村岡格は、松前藩々校徽典館で学ぶなかで、萬巻楼文庫の利用を通して書物の有用性を意識した。その後、函館医学所でのお雇い外国人教師エルドリッジとの出会いによって、欧米の図書館思想を知ること、さらに自ら意識の基層にあった図書館運営を強く志向するようになったものとみることができる。

最初は、成ヶ沢賢治の意思に賛同しての文庫経営への参加であった。だが残念ながら、森文庫は明治42年から実質3年間の短い活動期間であり、村岡格の七飯村への転出とともに、文庫の利用も不振に陥り自然休館となる。

村岡格が、転居先の七飯村で開設の岳陽文庫にしても、森文庫のときと同様、常設展示室を設けるなど、文化センター的機能も保持することに努めている。しかし、この場合も村岡格をサポートする人材不足が、文庫の開館日数を維持できなかった理由と推察される。結局、この岳陽文庫も開設3年にして休館という、やはり短期間の活動に終わるのである。現在、岳陽文庫に関する情報は、これ以上の事は不詳である。

ところで、これまで北海道の縦覧所に関して、明治6（1873）年5月17日「村岡格・原川亘・村山左富の3氏、開拓使判事宛て図書縦覧会等に関する意見書を提出」（26）したとされていた。つまり森村在住の村岡、原川、村山3氏連盟の意見書といわれていた。だが、この度の村岡文庫関係資料調査の過程で、この件の根拠とされる『縦覧会等に関する件』の資料を改めて精査したところ、これまでに説明されてきたこの件に再検証が迫られることになった。

すなわち、根拠とされた『縦覧会等に関する件』の文書の署名からは、

村岡格、原川亘、両氏の名前は確認できなかった。署名では、渡島国江刺（江差）中歌町在住の開拓使貫属士族村山左富による単独の意見書となっている。

従って、この件に関しては、「明治6（1873）年5月17日 江差町中歌在住の村山左富、開拓使判事宛て図書縦覧会等に関する意見書提出」と修正されるべきものと考えられる。村山格の森村赴任は、先に記述のごとく明治13年10月であり、この点からも明治6年5月17日とは符合しない。

ただ、なぜ村岡文庫関係の資料の中に、この『縦覧会等に関する件』の文書が含まれていたのか。また、村岡格と村山左富との接点・関係はなど、なお今後の詳しい精査が必要である。

本稿をまとめるに当たり、特に森町教育委員会には貴重な関係資料等の調査・利用にご配慮いただきました。ここに記して謝意を申し上げます。

## 《注》

- (1) 大島美津子 「地方制度」『講座日本近代法発達史』第8巻 勁草書房 1959.10 p.70
- (2) 池田源吾 『戊申詔書と地方事績』 小樽 池田書店 明治44. 10 174p.
- (3) 現在、森教育委員会が所管している村岡文庫の関係資料は、村岡格と村岡家代々（松前藩医の家柄）の資料とを併せ、およそ3,100点が所蔵されている。そのうち書籍は、医学書を中心として1,239点あり、その殆どが和本である。他に、文書、簿冊、辞令、地券、書簡、写真、軸物、器物などとなっている。器物としては、医療関係の器具・器械類が多く所蔵されているほか、アイヌの人々の生活関連調度品類をはじめとした、多数の民族資料も含まれている。資料の概要は、『村岡文庫目録』（森町教育委員会 1976. 3 70p.）として利用可能である。
- (4) この件に関しては、筆者「北海道における新聞縦覧所開設の経緯」



(『北海道武蔵女子短期大学紀要』第37号 平成17. 3) を参照された  
い。

- (5) 『北海道毎日新聞』第193号 明治21年3月7日 p.2 (藤島隆『北海道図書館史新聞資料集成—明治・大正篇— 北海道出版企画センター 2003.11 p.28所収)
- (6) 『北海道毎日新聞』は、現在の『北海道新聞』の基となった新聞である。その前身は、明治20 (1887) 年1月創刊の『北海新聞』で、同年10月に『北海道毎日新聞』として安部宇之八が経営を引き継いだものである。
- (7) 池田源吾 前提書 p.121-122
- (8) 全 上 p.122
- (9) 『森町史』 森町 昭和55.3 p.870
- (10) 『函館毎日新聞』第9113号 明治43.11.7 p.7 (藤島隆 前提書 p.93)
- (11) 全 上 第9336号 明治44.6.25 p.5 (藤島隆 前提書 p.98)
- (12) 全 上 第10678号 大正4.4.13 (藤島隆 前提書 p.143)
- (13) 『森之教育』第5号 森教育会 大正2.9.3 p.3
- (14) 教育会は、明治16 (1883) 年設立の大日本教育会をその頂点とし、その下に都道府県の各教育会が、さらにその下に市町村の各教育会が組織されるというピラミッド型の国内最大の教員組織団体であった。この当時、全国各地教育会の頂点に立つ大日本教育会 (会長は文部大書記官辻新次) が「本会ノ目的ハ同土糾合シテ我邦教育ノ普及改良及ビ上申ヲ図リ併セテ教育上ノ施政ヲ翼賛スルニアリ」(大日本教育会規約第1條) とし、国の教育施策を下達する御用団体としての役割を担った、翼賛型の性格をもってスタートしている。このことは、この後全国各地で組織された各地方教育会の組織の上層部には、教育行政担当部局の幹部や郡区役所の学事関係者あるいは、地方有力者の参

加が多数みられた。従って、森村教育会の会長に森村長が就任したのも当然の帰結といえる。いわば、教育会は「半官半民」の性格であった。ちなみに、明治24（1889）年組織された北海道教育会会長には、当初、大槻吉直北海道庁第一部長が就任している。

- (15) 『森之教育』第6号 大正2.11 p.1
- (16) 全 上 第8号 大正3.3 p.2
- (17) 全 上 第15号 大正4.5 p.3-4
- (18) 全 上 第16号 大正4.8 p.3-4
- (19) 全 上 第24号 大正6.2 p.4
- (20) 『北海道報』第2116号 大正6.9.23 p.3（藤島隆 前提書 p.178）
- (21) 萬巻楼文庫は、弘化（1844～47）年間頃に第16代藩主松前昌広により藩校徽典館に付設されたもので、およそ4,500巻余の蔵書を有し、北海道における図書館の嚆矢とされる。この萬巻楼文庫は、その後明治時代に入り、その一部蔵書2,000冊余が競売にかけられた。これを函館の商人千葉重吉が入手し、自宅に温故舎文庫（明治17（1884）年3月）として公開したと言われている。この温故舎文庫については、その蔵書と共に現在のところ不詳である。また残りの蔵書についても、明治期に一時松前教育会に、次いで松城小学校に預けられたが、戦後松前町役場に保管されるも、昭和24（1949）年6月5日の火災により焼失した。現在、この萬巻楼文庫の一部とみられる「徽典館」蔵版の書『古文孝経』が、市立函館図書館に確認されている。この『古文孝経』は、儒学者太宰春台の序のある書の復刻とされ藩校徽典館で印刷され、藩校の教科書として使用された。木活字を用いて北海道で出版され、一名『松前孝経』とも呼ばれている。
- (22) エルドリッジ **Stuart Eldridge** 天保14（1843）～明治34（1901）年米国ペンシルベニア州フィラデルフィア出身、医師。開拓使顧問ケ

プロンの書記兼医師として一行と来日。その後開拓使外科医長として函館病院に赴任し、一人で函館医学所生徒の講義・指導を行うとともに患者の治療にあたった。明治7（1874）年、横浜十全病院に転居。明治34（1901）年11月、横浜山手町に没した。

- (23) 武内博 『来日西洋人名事典』増補改訂普及版 日外アソシエーツ  
1995.1 p.62
- (24) 石井敦 「図書館史」『図書館教育資料集成、4』白石書店 1978.  
4 p.13-14
- (25) 開拓使 『開拓使日誌 第1号 明治4年自辛未8月至9月』  
教師ケプロンより黒田次官への書翰写  
今般北海道へ開拓使庁及ヒ諸学校御建築相成候ニ付キ、左ノ緊要事  
件ニ御着意有之度奉存候。都テ教化ノ進歩ヲ輔クルニハ、文房（ライ  
ブラリー）及ヒ博物院ノ欠ク可カラサルハ当然ナリ
- (26) 坂本龍三、谷口一弘、藤島隆 『年表・北海道の図書館』北の文  
庫 1992.9 p.5

#### 《参考文献》

- 阿部たつを『村岡格』函館 村岡潤一郎 昭和43.3 161p.
- 小林露竹『北海道渡島国森町沿革史年表』森町教育委員会 昭和43.9  
84p.
- 小井田武、高木崇世之 『森町の歴史散歩』森地方史研究会 1982.10  
205p.
- 『文部省第37～54年報』
- 『北海道庁統計書一学事の部一』第27～48回 大正4～昭和11年度
- 『北海道教育沿革誌』北海道庁内総務部教育兵事課 大正7.8 310p.
- 『村岡文庫目録』森町教育委員会 昭和51.3 70p.

《付・森文庫、岳陽文庫関係年表》

- 明治21（1888）． 2.23 森村菊地志賀右エ門商店内に新聞縦覧所開設  
23（1890）． 4. 村岡格 森村森病院長に赴任  
41（1908）． 11. 成ヶ沢賢治蔵書を一般公開  
42（1909）． 2.23 森文庫 森村柳沢に開設  
． 3. 森文庫主催の展覧会開催  
． 3. 4 森文庫告示  
44（1911）． 1.16 森村教育会設立 機関紙『森之教育』創刊  
大正 2（1913）． 5. 村岡格 七飯村に転居  
． 7.25 村岡格 岳陽文庫開設（七飯村大字軍川字長井川）  
． 9.24 森村教育会 森文庫引き継ぎを決定  
4（1915）． 6.10 森文庫図書閲覧規定定める  
． 9.17 森村教育会 臨時総会にて天皇即位記念森文庫巡  
回文庫設置を決定  
5（1916）． 12.24 森村教育会森文庫巡回規定定める  
6（1917）． 2.20 機関紙『森之教育』第24号で休刊  
12（1923）． 3. 5 村岡格死去（74歳）